

資 料

小学校の体育授業における事故の実態 —日本スポーツ振興センター「学校事故事例検索データベース」の分析から—

A Survey on Accidents in Elementary School Physical Education Classes
— focusing on a database of JAPAN SPORT COUNCIL —

服部 伸一*¹

要約：本稿では、データベースを用いて、小学校の体育授業でどのような事故が起きているのか、その実態を把握することを目的とした。主な結果を以下に示す。

- 1) 小学校の体育授業において、15年間で32件の死亡事故が発生しており、1～3年生で全体の59.1%を占めていた。「水泳」25.0%、「準備・整理運動」及び「短距離走」15.6%、「持久走・長距離走」12.5%という結果であり、水泳・陸上運動で多くなっていた。死亡事故の種別については、「心臓系突然死」40.6%、「溺死」21.9%、「大血管系突然死」及び「中枢神経系突然死」がそれぞれ15.6%の順となっており、突然死が71.8%を占めていた。
- 2) 障害事故は215件発生しており、4年生以上で全体の67.4%を占めていた。障害事故の種別については、「外貌・露出部分の醜状障害」29.8%、「視力・眼球運動障害」18.6%、「精神・神経障害」14.0%、「歯牙障害」12.1%の順であった。運動種目別の障害事故数については、「跳び箱運動」が10.2%、「体操（組体操）」9.8%、「サッカー・フットサル」7.0%、「マット運動」6.5%の順であり、特に器械運動系の種目で多くなっていた。
- 3) 負傷事故は、高学年になるほど増加傾向となっていた。また、種別としては「骨折」（31.9%）が最も多く、次いで、「捻挫」29.5%、「挫傷・打撲」27.6%となり、上位3つで全体の89.0%を占めていた。負傷の部位については、「上肢部」43.7%、「下肢部」31.7%、「体幹部」10.6%の順であった。運動種目別では、「跳び箱運動」18.4%、「バスケットボール」13.8%の順で多くなっていた。

Key Words：小学校, 体育授業, 事故, データベース, 注意義務

1. はじめに

スポーツ庁は、平成27（2015）年6月、学校における体育活動中の重大事故の多発を受けて、「学校における体育活動中の事故防止等について」を各都道府県及び指定都市教育委員会に通知し、事故防止の徹底や事故の際の適切な措置を講ずるよう周知徹底を図ってきた。その後も社会動向を鑑みて、「組体操等の事故防止」(2016)、「ハンドボール等のゴールの転倒による事故防止について」(2017)、「冬山登山の事故防止について」(2017)、「熱中症事故の防止について」(2018)、「水泳等の事故防止について」(2019)など、児童生徒の生命に関わる個々の案件について次々と通知が出された。これらの通知は事務連絡であり、法的拘束力はないものの体育活動中の

事故に対する関心の高さを示している。

小学校の場合、学校の教育活動全体で起こっている障害事故のうち、30%程度が各教科等の授業時間中に発生しており、そのうち「体育」が約70%を占めている（日本スポーツ振興センター、2017）。事故を未然に防ぐためには、事故発生の背景や機序を明らかにした上で、事故防止の対策と安全な指導の在り方を同時に検討する必要がある。

中教審の答申「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」によれば、義務教育9年間を見通した教科担任制の在り方について、小学校高学年に教科担任制を導入する方向が目指されている（中央教育審議会、2021）。しかし、現状では、体育の専科教員を配置している小学校は全体の2.8%に留まっているという報告がある（スポーツ庁、2018）。小学校には女性教師が多く、体育指導に関する多くの事項に対し悩みを抱えていることが指

2022年11月15日受付／2023年1月11日受理

*¹ HATTORI Shinichi

関西福祉大学 教育学部

摘されており（加登本・松田・木原ら，2010），体育授業への負担感は決して小さくない。中学校・高等学校の体育の教員免許を有する小学校教員は少なく，女性教師のみならず，経験年数の浅い教師，体育指導を不得意とする教師に対して安全管理の視点を含めた様々なサポートが必要であろう。

我が国では，独立行政法人日本スポーツ振興センターが，災害共済給付制度に基づく給付金の対象者の事故事例を集積し，『学校管理下の災害』という年次報告書を発行している。平成17年度分からは「学校安全 Web」において「学校事故事例検索データベース」（以下，「データベース」という）として公開され，学校種，事故の種別，被災学年，性別，競技種目，発生場所など，研究者の分析意図に基づいて，データを抽出できるようになった。

このデータベースを用いた研究は多いが，体育授業との関連では，器械運動系種目（平塚，2020），ソフトボール（嘉屋・熊野，2021）に着目した研究がある。いずれも特定の種目に限定する形で外傷・障害事故の発生状況を分析し，エビデンスに基づいてリスクを低減するための方策が検討されている。しかし，小学校の体育授業で発生した事故を俯瞰しようとした研究はみられない。

そこで，本研究では，本データベースを用いて，小学校の体育授業における事故の実態を調査し，事故の全体的傾向と特徴を整理することを目的とした。

2. 用語の定義

本研究では，災害共済給付制度に基づき，以下のように入語を定義する。「負傷」とは，その原因である事由が学校の管理下で生じたもので，療養に要する費用の額が5,000円以上のものを指す。「疾病」とは，その原因である事由が学校の管理下で生じたもので，療養に要する費用が5,000円以上のもののうち，文部科学省令で定めているものを指す。例として，熱中症，外部衝撃等による疾病，異物の嚥下または迷入による疾病などが挙げられる。

また，「障害」とは，学校の管理下で発生した負傷及び疾病が治った後に残った障害で，その程度により1級から14級に区分されるものを指す。障害見舞金は82万円～3,770万円である。さらに，「死亡」とは，学校の管理下において発生した事件に起因する死亡及び疾病に直接起因する死亡を指す。死亡見舞金は2,800万円である。これら「負傷」「疾病」「障害」「死亡」を総称して，「事故」という用語を用いることとする。

3. 方法

死亡・障害については，平成17（2005）年度から令和元（2019）年度までの15年間のデータベースを利用した。負傷・疾病については，『学校管理下の災害』で公開されている令和2（2020）年度版の単年度データを用いた。本研究では，体育授業中の事故の全体傾向を把握するため，一部を除いて学年・性別を分けずに一括して集計を行った。

4. 結果

1) 死亡

年次推移，学年別の死亡事故数，運動種目別の死亡事故数，死亡事故の種別，発生場所について集計した。また，死亡事故32件の発生状況の詳細について，一覧にまとめた。

表1に，死亡事故数の年次推移について示した。死亡事故数は，平成17（2005）年度が5件と最も多く，毎年1～3件程度発生していた。なお，文末の別表1に，死亡事故の発生状況の詳細について示したので参照されたい。

表1 死亡事故数の年次推移

年度	西暦	件数
平成17	2005	5
平成18	2006	1
平成19	2007	3
平成20	2008	1
平成21	2009	2
平成22	2010	1
平成23	2011	4
平成24	2012	1
平成25	2013	2
平成26	2014	2
平成27	2015	1
平成28	2016	3
平成29	2017	0
平成30	2018	3
平成31	2019	3
合計		32

表2に，学年別の死亡事故数を示した。多い方から順に6年生10件（31.3%），1年生8件（25.0%），3年生6件（18.8%）となり，1～3年生で全体の59.1%を占めていた。なお，表には示していないが，性別にみると男子19名（59.4%），女子13名（40.6%）と，男子がやや多くなっていた。

表2 学年別の死亡事故数

学年	件数	%
1年生	8	25.0
2年生	5	15.6
3年生	6	18.8
4年生	1	3.1
5年生	2	6.3
6年生	10	31.3
合計	32	100.0

表3に、運動種目別の死亡事故数を示した。「水泳」8件(25.0%)、「準備・整理運動」及び「短距離走」5件(15.6%)、「持久走・長距離走」4件(12.5%)という結果であり、水泳・陸上運動で多くなっていた。

表3 運動種目別の死亡事故数

運動種目	件数	%
水泳	8	25.0
準備・整理運動	5	15.6
短距離走	5	15.6
持久走・長距離走	4	12.5
バスケットボール	2	6.3
サッカー・フットサル	1	3.1
スキー	1	3.1
走り高跳び	1	3.1
鉄棒運動	1	3.1
その他	3	9.4
合計	32	100.0

表4に、死亡事故の種別について示した。「心臓系突然死」13件(40.6%)、「溺死」7件(21.9%)、「大血管系突然死」及び「中枢神経系突然死」が5件(15.6%)の順となっており、突然死が全体の71.8%を占めていた。

表4 死亡事故の種別

種別	件数	%
心臓系突然死	13	40.6
溺死	7	21.9
大血管系突然死	5	15.6
中枢神経系突然死	5	15.6
全身打撲	1	3.1
内臓損傷	1	3.1
合計	32	100.0

表5に、死亡事故の発生場所について示した。「運動場・校庭(園庭)」13件(40.6%)、「体育館・屋内運動場」及び「プール」が8件(25.0%)という順であった。

表5 死亡事故の発生場所

場所	件数	%
運動場・校庭(園庭)	13	40.6
体育館・屋内運動場	8	25.0
プール	8	25.0
山林野(含スキー場)	1	3.1
道路	1	3.1
その他	1	3.1
合計	32	100.0

2) 障害

表6に、障害事故数の年次推移について示した。平成17(2005)年以降の15年間では、毎年10~20件程度発生していた。

表6 障害事故数の年次推移

年度	西暦	件数
平成17	2005	12
平成18	2006	14
平成19	2007	16
平成20	2008	15
平成21	2009	16
平成22	2010	12
平成23	2011	14
平成24	2012	19
平成25	2013	15
平成26	2014	11
平成27	2015	8
平成28	2016	20
平成29	2017	20
平成30	2018	9
平成31	2019	14
合計		215

表7に、年齢別の障害事故数について示した。全215件のうち、6年生66件(30.7%)、5年生48件(22.3%)、4年生31件(14.4%)の順で多く、4年生以上で全体の67.4%を占めていた。

表7 学年別の障害事故数

学年	件数	%
1年生	17	7.9
2年生	26	12.1
3年生	27	12.6
4年生	31	14.4
5年生	48	22.3
6年生	66	30.7
合計	215	100.0

表8に、障害事故の種別について示した。「外貌・露出部分の醜状障害」64件(29.8%)、「視力・眼球運動障害」40件(18.6%)、「精神・神経障害」30件(14.0%)、「歯牙障害」26件(12.1%)、「上肢切断・機能障害」22件(10.2%)の順であった。

表8 障害事故の種別

種別	件数	%
外貌・露出部分の醜状障害	64	29.8
視力・眼球運動障害	40	18.6
精神・神経障害	30	14.0
歯牙障害	26	12.1
上肢切断・機能障害	22	10.2
せき柱障害	10	4.7
手指切断・機能障害	7	3.3
下肢切断・機能障害	7	3.3
胸腹部臓器障害	6	2.8
聴力障害	3	1.4
合計	215	100.0

表9に、運動種目別の障害事故数について示した。「跳び箱運動」が22件(10.2%)、「体操(組体操)」21件(9.8%)、「サッカー・フットサル」15件(7.0%)、「マット運動」14件(6.5%)の順であり、器械運動系の種目で多くなっていた。

表9 運動種目別の障害事故数

運動種目	件数	%
跳び箱運動	22	10.2
体操(組体操)	21	9.8
サッカー・フットサル	15	7.0
マット運動	14	6.5
水泳	13	6.0
鉄棒運動	12	5.6
球技(その他)	10	4.7
ソフトボール	8	3.7
スキー	7	3.3
バスケットボール	7	3.3
準備・整理運動	7	3.3
走り高跳び	7	3.3
不明	7	3.3
短距離走	6	2.8
持久走・長距離走	5	2.3
ドッジボール	4	1.9
陸上競技(その他)	4	1.9
体操(その他)	3	1.4
縄跳び	3	1.4
走り幅跳び	2	0.9
ボートボール	1	0.5

運動種目	件数	%
障害走(ハードル)	1	0.5
ラグビー	1	0.5
投てき	1	0.5
野球(含軟式)	1	0.5
その他	33	15.3
合計	215	100.0

表10に、障害事故の発生場所について示した。「体育館・屋内運動場」が96件(44.7%)で最も多く、次いで「運動場・校庭(園庭)」92件(42.8%)、「プール」13件(6.0%)という順であった。

表10 障害事故の発生場所

場所	件数	%
体育館・屋内運動場	96	44.7
運動場・校庭(園庭)	92	42.8
プール	13	6.0
山林野(含スキー場)	7	3.3
階段	2	0.9
廊下	2	0.9
その他	2	0.9
教室(保育室)	1	0.5
合計	215	100.0

3) 負傷

表11に、学年別の負傷事故数について示した。全80,226件うち、6年生22,379件(27.9%)、5年生18,369件(22.9%)、4年生14,961件(18.6%)の順で多く、4年生以上で全体の69.4%となっていた。

表11 学年別の負傷事故数

学年	件数	%
1年生	5,421	6.8
2年生	7,906	9.9
3年生	11,190	13.9
4年生	14,961	18.6
5年生	18,369	22.9
6年生	22,379	27.9
合計	80,226	100.0

注) 令和2年度版

表12に、負傷事故の種別について示した。「骨折」が24,301件(31.9%)で最も多く、次いで、「捻挫」22,477件(29.5%)、「挫傷・打撲」20,998件(27.6%)であり、上位3つで全体の89.0%を占めていた。

表12 負傷事故の種別

種別	件数	%
骨折	24,301	31.9
捻挫	22,477	29.5
挫傷・打撲	20,998	27.6
靭帯損傷・断裂	2,523	3.3
脱臼	2,088	2.7
挫創	1,773	2.3
擦過傷	601	0.8
歯牙破折	515	0.7
裂創	419	0.6
切創	212	0.3
刺創	133	0.2
割創	19	0.0
熱傷・火傷	19	0.0
その他	8	0.0
計	76,086	100.0

注) 令和2年度版

表13に、負傷部位別にみた負傷事故数について示した。大区分としてみると、「上肢部」38,175件(43.7%)、「下肢部」27,683件(31.7%)、「体幹部」9,270件(10.6%)の順であった。

表13 部位別にみた負傷事故数

部位	件数	%	
頭部	2,856	3.3	
顔部	前額部	495	0.6
	眼部	4,066	4.7
	頬部	491	0.6
	耳部	138	0.2
	鼻部	697	0.8
	口部	503	0.6
	歯部	1,890	2.2
	顎部	705	0.8
	顔部小計	8,985	10.3
体幹部	頸部	4,147	4.7
	肩部	1,584	1.8
	胸部	817	0.9
	腹部	174	0.2
	背部	517	0.6
	腰部	1,494	1.7
	臀部	537	0.6
	体幹部小計	9,270	10.6
	上肢部	上腕部	1,312
肘部		2,620	3.0
前腕部		3,777	4.3
手関節		5,824	6.7
手・手指部		24,642	28.2
上肢部小計		38,175	43.7

	部位	件数	%
下肢部	大腿部・股関節	2,021	2.3
	膝部	4,586	5.3
	下腿部	1,650	1.9
	足関節	13,394	15.3
	足・足指部	6,032	6.9
	下肢部小計	27,683	31.7
	その他	339	0.4
合計	87,308	100.0	

注) 令和2年度版

表14に、運動種目別の負傷事故数(上位項目)を示した。「跳び箱運動」15,260件(18.4%)、「バスケットボール」11,414件(13.8%)の順で多くなっていた。第1位の「跳び箱運動」について、負傷の種類を表15に示したところ、「骨折」が5,902件(38.7%)で最も多く、次いで、「捻挫」5,112件(33.5%)、「挫傷・打撲」3,418件(22.4%)の順となっていた。

表14 障害事故の種別

順位	運動種目	件数	%
1	跳び箱運動	15,260	18.4
2	バスケットボール	11,414	13.8
3	マット運動	5,449	6.6
4	サッカー・フットサル	4,725	5.7
5	障害走(ハードル)	3,217	3.9
6	ドッジボール	3,553	4.3
7	準備・整理運動	2,903	3.5
8	鉄棒運動	2,804	3.4
9	体操(組体操)	2,559	3.1
10	縄跳び	2,519	3.0

注) 令和2年度版。%は全体の負傷件数82,832件中の割合を示した。

表15 跳び箱運動の種類別負傷事故数(上位項目)

順位	種類	件数	%
1	骨折	5,902	38.7
2	捻挫	5,112	33.5
3	挫傷・打撲	3,418	22.4
4	靭帯損傷・断裂	428	2.8
5	脱臼	263	1.7
6	挫創	50	0.3
7	歯牙破折	34	0.2
8	裂創	20	0.1
9	擦過傷	19	0.1
10	切創	6	0.0

注) 令和2年度版。%は全体の負傷件数15,260件中の割合を示した。

4) 疾病

表 16 に、疾病の種類別件数について示した。「外部衝撃等に起因する疾病」2,089 件 (50.2%)、「負傷に起因する疾病」1,600 件 (38.5%)、「異物の嚥下・迷入」218 件 (5.2%)、「熱中症」143 件 (3.4%) の順であった。

表16 疾病の種類別件数

種類	件数	%
外部衝撃等に起因する疾病	2,089	50.2
負傷に起因する疾病	1,600	38.5
異物の嚥下・迷入	218	5.2
熱中症	143	3.4
接触性の皮膚炎	92	2.2
食中毒以外の中毒	9	0.2
溺水	7	0.2
食中毒	2	0.0
計	4,160	100.0

注) 令和 2 年度版

5. 考察

「学校における体育活動中の事故防止について」(体育活動中の事故防止に関する調査研究協力者会議, 2012) によれば、指導者には、児童生徒の生命・身体の安全を確保するために必要な指導及び監督をする義務(注意義務)がある。注意義務には、①安全を確保する義務(危険予測義務)、②危険な結果を回避する義務(危険回避義務)の二面がある。潜在的な危険を早く発見し、早く取り除く配慮、潜在的な危険が重なり合わないようにする配慮や二次的な事故にならないようにする配慮等が基本的な留意点である。

一方、「転んだ際にとっさに手が出ず、頭や顔に直接ケガをする」という子どもの実態が問題視されて久しい(中村, 2004)。多くの識者が指摘するように、こうした事態の背景には子どもの外遊びが減少したことと公園の遊具撤去などによって、転ぶという経験自体が不足していると推測される。

令和 3 年度「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」の結果において、体力合計得点は、令和元年度に比べ、小中男女ともに低下した(スポーツ庁, 2021)。低下の原因として、運動時間の減少、学習以外のスクリーンタイムの増加、肥満児の増加を挙げている。同調査では、コロナの感染拡大防止に伴い、子どもの生活スタイルが変わり、学校の活動が制限されたことが影響している可能性を指摘している。

このように、教師による注意義務の強化への期待と子

どもの運動経験の変化等により、小学校での体育授業の運営は新しい局面を迎えている。つまり、教師自身の「これくらいならできるだろう」という経験則に頼れなくなっており、安全の視点から授業内容を再構築する必要に迫られているのではないか。

以上のような問題意識から、本研究では、近年の体育授業中の事故の特徴や傾向について、データベースを基に客観的に把握しようと試みた。まず、死亡事例としては、全 32 件のうち、「突然死」23 件、「溺死」7 件、「ゴールポスト」の転倒(全身打撲)1 件、「内臓損傷」1 件が挙げられていた。

突然死については、「突然死を防ぐための 10 か条」に記載されているように、学校心臓検診(健康診断)と事後措置を確実にを行うこと、学校生活管理指導表の指導区分を順守すること、健康観察の徹底及び救急時の体制整備などが対応の原則である(独立行政法人日本スポーツ振興センター, 2020)。担任教師は、家庭や養護教諭と連携を取り、運動場面では細心の注意を払うとともに、本人に対して自己の病態を正しく理解させる指導が欠かせない。

「溺死」について、死亡事例の詳細を読む限り、泳力検定や自由泳ぎの場面で溺れた事案が複数あった。「水泳指導の手引き」(文部科学省 2014)にあるように、教師はいかなる指導場面でも油断をせず、「監視の位置」を守り、「監視の要点」に則った指導の徹底を図っていかねばならない。

障害事故では、「跳び箱運動」、「体操(組体操)」、「マット運動」など、器械運動系種目での事故が目立っていた。跳び箱運動に絞って障害事故の発生状況の詳細をみると、技の判別が可能なものとして、「開脚跳び」12 件、「台上前転」3 件、「横跳び」3 件、「前方倒立回転」1 件、「頭跳ね跳び」1 件が挙げられた。

直接的な要因としては、着手の失敗、着地の失敗、台上からの転落、踏み切りの失敗などが見出された。必ずしも難しい技術ではなく、従来なら「これくらいはできるだろう」と思われていた運動で事故が発生している。この点については、「体操(組体操)」でも同様の傾向があり、補助倒立、サボテン、肩車、タワーなど、二人組もしくは三人組の技で事故が多発していた。事故防止の観点から、運動種目の練習に入る前には、子どもの体格への配慮、体力・運動能力、運動経験の把握が必要となってくるであろう。

負傷事故では、高学年に移行するに従って外力が高ま

り、事故数が多くなる傾向がみられた。負傷事故の種別としては、「骨折」31.9%、「捻挫」29.5%、「挫傷・打撲」27.6%の3つで全体の90%近い割合となっていた。運動種目では、「跳び箱」、「バスケットボール」で事故が多く、負傷部位は「手・手指部」の負傷が28.2%と最も多くなっていた。

北村（2021）は、手でボールを扱ったり、手で体を支えるなど、手を使う運動では手や指の骨折が多いこと、複数人が交錯する運動、ボールを扱いながら走ったり、ジャンプしてボールを扱うといったマルチタスクを伴う運動では、転倒や衝突による腕の骨折が多いこと、また、運動種目ごとに骨折が起きる状況にパターンがあるため、そのパターンを把握して対策を検討することを留意点として指摘している。特に、小学校の跳び箱運動では、開脚跳びの練習中に手が滑った場合、落下した場合、床に強打した場合、手の上に体が乗った場合に重症化していると分析した。これらの事故が起きるパターンが個々の教師に自覚され、実際の指導場面で活かされるかどうか、事故防止の要点となる。

以上、新しい学習指導要領に基づく「安全で、楽しい」体育授業の実現を図るためには、①子どもの体格、体力・運動能力、運動経験、健康状態などを考慮した無理のない指導計画を立てること、②過去に起きた事故事例から学び、教師が行うべき注意義務の内容を理解した上で、より具体的な予防策を講じつつ、適切な指導を行うことが重要であると考えられた。

6. まとめ

本稿では、データベースを用いて、小学校の体育授業でどのような事故が起きているのか、その実態を把握することを目的とした。主な結果を以下に示す。

- 1) 小学校の体育授業において、15年間で32件の死亡事故が発生しており、1～3年生で全体の59.1%を占めていた。「水泳」25.0%、「準備・整理運動」及び「短距離走」15.6%、「持久走・長距離走」12.5%という結果であり、水泳・陸上運動で多くなっていた。死亡事故の種別については、「心臓系突然死」40.6%、「溺死」21.9%、「大血管系突然死」及び「中枢神経系突然死」がそれぞれ15.6%の順となっており、突然死が71.8%を占めていた。
- 2) 障害事故は215件発生しており、4年生以上で全体の67.4%を占めていた。障害事故の種別については、「外貌・露出部分の醜状障害」29.8%、「視力・眼球

運動障害」18.6%、「精神・神経障害」14.0%、「歯牙障害」12.1%の順であった。運動種目別の障害事故数については、「跳び箱運動」が10.2%、「体操（組体操）」9.8%、「サッカー・フットサル」7.0%、「マット運動」6.5%の順であり、特に器械運動系の種目で多くなっていた。

- 3) 負傷事故は、高学年になるほど増加傾向となっていた。また、種別としては「骨折」（31.9%）が最も多く、次いで、「捻挫」29.5%、「挫傷・打撲」27.6%となり、上位3つで全体の89.0%を占めていた。負傷の部位については、「上肢部」43.7%、「下肢部」31.7%、「体幹部」10.6%の順であった。運動種目別では、「跳び箱運動」18.4%、「バスケットボール」13.8%の順で多くなっていた。

<引用文献>

- 嘉屋千紘・熊野暢人（2021）学校管理下でのソフトボール競技における外傷・障害発生状況について、関西福祉大学研究紀要、24、175-180
- 加登本仁・松田泰定・木原成一郎ほか（2010）体育授業の悩み事に関する調査研究（その1）- 教職経験に伴う悩み事の差異を中心として -、学校教育実践学研究、16、85-93
- 北村光司（2021）データ分析からの事故防止の留意点、「体育活動中における骨折事故の傾向及び事故防止対策」調査報告書、独立行政法人日本スポーツ振興センター、5-12
- 独立行政法人日本スポーツ振興センター 学校管理下の災害、令和2年版
<https://www.jpnsport.go.jp/anzen/kankobutuichiran/tabid/1961/Default.aspx>（2021年8月1日閲覧）
- 独立行政法人日本スポーツ振興センター（2021）学校安全 Web
https://www.jpnsport.go.jp/anzen/anzen_school/anzen_school/tabid/822/Default.aspx（2021年8月1日閲覧）
- 独立行政法人日本スポーツ振興センター（2011）学校における突然死予防必携（改訂版）
https://www.jpnsport.go.jp/anzen/Portals/0/anzen/kenko/jyouthou/pdf/totsuzenshi/22/totsuzenshi22_1.pdf（2022年8月21日閲覧）
- 平塚卓也（2020）学校体育授業における器械運動系種目の障害事故- 日本スポーツ振興センター「学校事故事例検索データベース」の分析から -、環太平洋大学研究紀要、17、149-153
- 中村和彦（2004）子どものからだに危険はない、日本標準、26-31
- 文部科学省スポーツ・青少年局参事官付（2015）. 学校における体育活動中の事故防止等について（通知）

- 文部科学省総合教育政策局(2018)熱中症事故の防止について(依頼)
- 文部科学省(2014)第4章「水泳指導と安全」, 学校体育実技資料第4集 水泳指導の手引き(三訂版), 124-140
- 文部科学省(2015)第4章「器械運動系の指導と安全」, 学校体育実技資料第10集 器械運動指導の手引き, 158-164
- スポーツ庁政策課学校体育室(2016)組体操等による事故の防止について(通知)
- スポーツ庁政策課学校体育室(2017)ハンドボール等のゴールの転倒による事故防止について(通知)
- スポーツ庁(2017)冬山登山の事故防止について(通知)
- スポーツ庁政策課学校体育室(2018)熱中症事故の防止について(通知)
- スポーツ庁政策課学校体育室(2019)水泳等の事故の防止について(通知)
- スポーツ庁(2018)全国体力・運動能力, 運動習慣等調査 第2章「体育専科教員が配置されており, 担任と2人で授業をしている小学校とそれ以外の小学校の比較」, 52-55
- スポーツ庁(2021)全国体力・運動能力, 運動習慣等調査結果のポイント
https://www.mext.go.jp/sports/content/20211221-spt_sseisaku02-000019583_1.pdf (2022年8月21日閲覧)
- 中央教育審議会(2021)「令和の日本型学校教育」の構築を目指して(答申)
https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt_syoto02-000012321_1-4.pdf (2022年8月1日閲覧)
- 体育活動中の事故防止に関する調査研究協力者会議(2012). 学校における体育活動中の事故防止について(報告書), 19

別表1 死亡事故の発生状況の詳細

西暦	記号	死亡・障害	死亡障害種	被災学年	性別	競技種目	発生場所 2	発生状況
2005	17 死 1	死亡	溺死	1	男	水泳	道路	体育授業中、近くの温水プールでの水泳学習を終え、準備のできた児童から学校へ戻っていたが、当時、豪雨で急激に増水し、勢いの強い流れの為、道路側溝のグレーチングがはずれ、2、30 cm開いていた。他の児童が、側溝にはまり、助け出されたが、その後本児童の水着袋が発見され、捜索されるも、翌日川中州で発見された。側溝から転落し、流されたものと思われる。
2005	17 死 2	死亡	中枢神経系突然死	1	女	鉄棒運動	運動場・校庭(園庭)	体育の授業中、低鉄棒の上に腰をかける体勢から飛び降りる運動をしていた際、鉄棒から前向きに落下した。地面に倒れているのを他の児童が見ているが、常勤講師は他の児童を指導していたので見ていなかった。鉄棒運動は、20分間。その後、他の児童とともに約10分間ボール運動を行い、さらに整理運動をして授業終了後のあいさつ時に、左上腕部の痛みを訴えた。すぐに保健室へ連れて行き、その後、嘔吐したので病院へ搬送した。診察の結果、脳に出血が見られ、手術を行った。
2005	17 死 3	死亡	心臓系突然死	6	女	短距離走	運動場・校庭(園庭)	体育の授業中、運動会の100メートル走の練習として本生徒が100mを走った際、ゴールした後突然倒れ、意識を失った。本生徒は体育の授業が始まる前にウォーミングアップのために200mのジョギングをしてから、体育の授業を受けていた。病院に運ばれる救急車の中から心肺蘇生等の処置がなされ、病院でも続けられたが1時間30分後に死亡が確認された。
2005	17 死 4	死亡	心臓系突然死	6	男	短距離走	運動場・校庭(園庭)	体育の時間に、リレー(トラック半周55m)を自分の走れる速さで走っていたところ、第2コーナーで突然倒れた。
2006	18 死 1	死亡	心臓系突然死	6	女	バスケットボール	体育館・屋内運動場	体育のバスケットボールの授業中、5分程度の試合に2試合出場した。授業終了後に友人とゼッケンを片付け終わった際、友人に寄りかかるように、床にうつぶせに倒れた。養護教諭が現場に急行し、救急車が来るまでの間、人工呼吸と心臓マッサージを施す。救急車到着後、AEDを施すが、心臓停止、脈拍停止が続く。その後、脈は回復するが、意識がない状態が続き、後日死亡した。
2006	18 供 1	死亡	溺死	6	男	水泳	プール	体育の水泳指導中、本児童の身体に何らかの異変が起き、水中に沈みかけているところを友人が見つけてかかえあげたが、意識がなく心臓停止と呼吸停止状態であったので、心肺蘇生を行いながら救急車を要請し、病院へ搬送した。治療の結果、心臓の動きが回復したので設備の整っている病院へ転院し、集中治療室で治療を受けていたが、意識は戻らず後死亡した。
2007	19 死 1	死亡	心臓系突然死	1	男	水泳	プール	水泳授業終了時、幼少の時から、心臓に疾患を持っていた本児童の体の具合が悪くなり、プール東側の縁のオーバーフロアのコンクリート部分に頭をもたれかけて動かなくなった。本児童の体の状態を調べた結果、心肺の停止が確認され蘇生処置を行ったが脳症となった。救急搬送先の病院でリハビリ療法を受けるなどの治療を続け、養護学校に転入したが学校生活では、呼吸状態が不安定な日が続いていた。約7年後、心肺停止し急性心不全のため死亡した。
2007	19 死 2	死亡	溺死	5	男	水泳	プール	低学年プールで泳力検定の練習をしていたところ、溺れているのを担任が発見し、直ちにプールサイドに引き上げ、気道確保した。自力呼吸をしていたが、意識不明であったため、病院に搬送した。病院で手当を受けたが、手当の甲斐なく死亡した。
2007	19 死 3	死亡	心臓系突然死	2	男	準備・整理運動	体育館・屋内運動場	準備運動で「しっぽとりゲーム」(紅白の帽子を短パンにはさみ、それを取る)をしていて、1セット目(約1分)が終了し、1分の休憩後の2セット目の途中で本児童が「気持ちが悪い」と担任に申し出て、コートの外で他の児童と一緒に休んでいた。3セット目の鬼を決めている時、本児童の近くにいた他の児童が体調の変化に気がつき担任に知らせた。意識、呼吸がないことを確認し、人工呼吸を行ない、ドクターヘリで病院に搬送したが、同日死亡した。
2008	20 死 1	死亡	心臓系突然死	6	男	バスケットボール	体育館・屋内運動場	準備運動後、なわとびやバス、シュート練習を10分間ほど行い、5分の試合を2試合行った。試合後は得点係として座っていた。しばらくして意識を失ったため、救急車を要請し病院に搬送したが、同日死亡した。
2009	21 死 1	死亡	心臓系突然死	5	男	準備・整理運動	体育館・屋内運動場	ウォームアップのために体育館の周りを軽く走った。一周約85メートルを1周目はゆっくり走り、2周目はスキップで、3周目はサイドステップ(軽く跳ねながら蟹のように横に進んでいく運動)で自分のペースでゆっくり走った後、立ち止まって倒れた。救急車が到着するまで人工呼吸を行い、救急隊員はAEDを使用し救命処置を行ったが、同日死亡した。

西暦	記号	死亡・障害	死亡障害種	被災学年	性別	競技種目	発生場所2	発生状況
2009	21 死 2	死亡	中枢神経系 突然死	6	男	走り高跳び	体育館・屋 内運動場	走り高跳び用のバーやマットなどを運び、ダッシュとジョギングの繰り返し走を体育館10周行い、その後、2人組で、1人がジャンプして跳び越す運動を、1人20回ずつ行った。その後走り高跳びの練習を開始したが、体育館後方で本児童が仰向けになっていた。数分様子を見ていたが、意識はあるものの、言葉が返ってこない、右足が動かせないことなどから、救急車を要請し、病院で治療を受けたが、後日死亡した。
2010	22 死 1	死亡	溺死	2	男	水泳	プール	水泳の授業中、大プールに移動し自由泳ぎをしていたが、教師の目が行き届かなかった5分程の間に溺水した。
2011	23 死 1	死亡	溺死	3	男	水泳	プール	泳力測定中、18メートル付近で泳ぎを止めたにもかかわらず、立ち上がりずに体を斜めに傾け、片足でジャンプするように動き、顔は水面につき、手はバタバタと動かした。すぐに本児童を両手で助け上げ、プールサイドに運んだ。呼吸を確認し気道を確保し、タオルケットで体をくるんだ。その後様子が変わったので救急車を要請した。呼吸が弱くなったので、人工呼吸・心臓マッサージを行った。救急車で病院に搬送し、治療を受けた。その後入退院を繰り返し、翌年死亡した。
2011	23 死 2	死亡	心臓系 突然死	3	女	短距離走	運動場・校 庭（園庭）	リレーの練習で約100m走り、次走者にバトンを渡し、数歩歩いた後に倒れ意識不明となった。その後救急車で病院に搬送したが、死亡した。
2011	23 死 3	死亡	心臓系 突然死	1	女	持久走・長 距離走	運動場・校 庭（園庭）	5時間目の体育の時間、準備体操を終え、マラソン練習として運動場のトラックを学級全員で走っていた際、2周目（約300m）を走っている途中で、急に本児童が痙攣し込み泣きだした。その後ぐったりした。AEDを装着したがショック不要と解析された。救急車で病院に搬送後、処置を受けるが数時間後に死亡した。
2011	23 死 4	死亡	心臓系 突然死	6	女	持久走・長 距離走	体育館・屋 内運動場	本児童は、既往症があるものの運動制限はなく、昨年度の体力テストでは種目すべて実施していたことを事前に確認した。健康観察後、準備運動と軽いランニングによるウォーミングアップを行った。全員に2～3分程度の休憩をさせた後、シャトルランを開始した。本児童は、7～8回走った後、自ら走るのをやめ、歩いて友達の隣に座って休憩した。1分程度過ぎたとき、異変を感じた隣の児童が大声で呼び、駆けつけた教諭が事故を発見した。消防隊員が到着するまで心肺蘇生を行い、AEDによる救命処置を実施し病院に搬送されたが同日、死亡した。
2012	24 死 1	死亡	心臓系 突然死	6	男	準備・整理 運動	運動場・校 庭（園庭）	本児童は、既往症があり学校生活管理指導表のもと、全ての運動を中止するのではなく、息切れしない程度に参加することを許可されていた。体育の授業中、担任指導のもと、準備運動のランニングを始めた。1周目を走り終えたところで担任は休むように指示をした。他の児童と走っていた担任に、本児童が朝礼台付近で倒れているという連絡があり、急いで走っていくと意識がなく呼吸が少なかった。心肺蘇生を行い、病院に搬送した。その後、通院を続けていたが、数年後に症状が悪化し死亡した。
2013	25 供 1	死亡	溺死	2	男	水泳	プール	水泳の授業、大プールに移動し自由泳ぎをしていたが、教師の目が行き届かなかった5分程の間に溺死した。
2013	25 供 2	死亡	溺死	3	男	水泳	プール	泳力測定中、18メートル付近で泳ぎを止めたにもかかわらず、立ち上がりずに体を斜めに傾け、片足でジャンプするように動き、顔は水面につき、手はバタバタと動かした。すぐに本児童を両手で助け上げ、プールサイドに運んだ。呼吸を確認し気道を確保し、タオルケットで体をくるんだ。その後様子が変わったので救急車を要請した。呼吸が弱くなったので、人工呼吸・心臓マッサージを行った。救急車で病院に搬送し、治療を受けた。その後入退院を繰り返し、翌年死亡した。
2014	26 死 1	死亡	中枢神経系 突然死	6	女	水泳	プール	体育の授業中に、プールで25mをクロールで泳いでいたところ、急に意識不明となりプールに浮かんでいる状態となった。すぐにプールサイドに救助し、意識確認、119番通報、気道確保、胸骨圧迫、人工呼吸、AEDの装着等の心肺蘇生法を救急隊が到着するまで行った。病院で治療を受けるが、数日後に死亡した。
2014	26 死 2	死亡	心臓系 突然死	1	男	その他	運動場・校 庭（園庭）	体育に参加するため運動場に行く途中、校舎の前で倒れていたところを警備員が発見され、保健室に運ばれる。要請した救急車で病院に搬送、治療を受けるが同日死亡した。
2015	27 死 1	死亡	大血管系 突然死	1	男	持久走・長 距離走	運動場・校 庭（園庭）	3時間の体育の授業中、準備運動の一環として、運動場を自分の決めた速さで走っていた。運動場の1周と4分の3（190mあたり）を走ったところで、前のめりに倒れた。意識がなく心肺停止に陥り、救急搬送されたが、搬送先で死亡が確認された。

小学校の体育授業における事故の実態
 - 日本スポーツ振興センター「学校事故事例検索データベース」の分析から -

西暦	記号	死亡・障害	死亡障害種	被災学年	性別	競技種目	発生場所 2	発生状況
2016	28 死 1	死亡	中枢神経系 突然死	3	女	準備・整理 運動	体育館・屋 内運動場	授業中、体育館で準備運動として7周を走り、縄跳び（前跳び、後ろ跳び各100回・交差跳びなど）と腹筋運動を行った後に、頭（右前額）をおさえて痛みを訴えた。担任が「頭をぶつけたの」と尋ねると、「どこもぶつけていません」と答えた。一緒に歩いて保健室に向かう途中体育館入口で倒れた。救急車を要請、病院で治療を受けたが、数日後に死亡した。
2016	28 死 2	死亡	内臓損傷	6	女	スキー	山林野（含 スキー場）	スキー場での体育授業で、コースをスキーで滑走中、他者と衝突した。事故発生後、パトロール隊員による処置を受けた後、病院に搬送されたが同日死亡した。
2016	28 死 3	死亡	中枢神経系 突然死	6	女	その他	その他	休憩時間に見づらさを感じていたが、3校時は体育だったため着替えて校庭へ向かった。担任へ申し出て、体育には参加せずに、そのまま一人で歩いて、校庭側のドアから保健室へ行った。目の見えづらさ、頭痛を訴え、ベッドに寝かせ、すぐに救急車を要請し、保護者と連絡した。本児童は当日、前日も頭部を打つようなことはなかったと話していた。病院に搬送されたものの、同日死亡した。
2018	30 死 1	死亡	心臓系 突然死	3	男	持久走・長 距離走	運動場・校 庭（園庭）	既往症のある本児童は、特別支援学級での体育の授業中、準備体操などを行った後、グラウンドをゆっくりしたペースで担任と先頭を走っていた。1周半を過ぎたところで顔面から転倒し、意識を失った。心肺蘇生を行い、病院で治療を受けたが翌日死亡した。
2018	30 死 2	死亡	全身打撲	4	男	サッカー・ フットサル	運動場・校 庭（園庭）	体育の授業中、サッカーのゲームをしていた。ゴールキーパーだった本児童は、自陣がゴールを決めて得点を入れたことに喜んでサッカーゴール（ハンドボール用ゴール）のネットにぶら下がった。その際、バランスを崩して地面に倒れ込んだ。直後にゴールポストが転倒し、倒れてうずくまっていた本児童の肩・背中を圧迫した。救急車を要請し、ドクターヘリにて移送され治療を受けたが同日死亡した。
2018	30 死 3	死亡	大血管系 突然死	2	女	準備・整理 運動	体育館・屋 内運動場	体育の授業中、ウォーミングアップで体育館を5周ジョギングした後の歩行中、急にふらつき、その場に倒れ、意識不明となった。救急車を要請し、救命措置を実施。病院で治療を受けたが同日死亡した。
2019	2019 死 1	死亡	大血管系 突然死	1	女	短距離走	運動場・校 庭（園庭）	体育の授業中、担任教諭を先頭に整理したままの順番で、ゆっくりと校庭のトラック1周（120m）を走った。トラック内で約5分間学年主任の話聞いた後、児童昇降口の階段の手前まで進んだところで本児童が倒れた。担任教諭が本児童を抱きかかえると、顔面蒼白で脱力状態であったため、すぐに保健室へ搬送した。心肺蘇生を行い、AEDを使用した。解析結果は「ショック不要」であった。救急車で病院に搬送後、数時間後に死亡した。
2019	2019 死 2	死亡	大血管系 突然死	3	女	短距離走	運動場・校 庭（園庭）	体育の授業中、校庭で障害物を使った折り返しリレーを行っていた際、次の走者にタッチをした後、数歩移動した待機場所で倒れた。心肺蘇生を行い、AEDを使用した。解析結果は「ショック不要」であった。救急車で病院に搬送されたが、同日死亡した。
2019	2019 死 3	死亡	大血管系 突然死	2	男	その他	運動場・校 庭（園庭）	体育の授業中、タグラグビーの試合時間を計測していた際、他の児童に声を掛けながらコート周囲を歩いていたが、突然コート脇で頭を抱え、タイマーの位置まで戻りうずくまって泣き始め、その後意識を失った。駆け付けた教員が呼吸と脈拍の確認を行い、救急車で病院に搬送されたが、数日後に死亡した。